様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　　5 月　　14 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008-2009
課題番号：２０７６０４３１
研究課題名（和文）　第二次世界大戦期の戦災建物保護に関する建築・都市・文化史的研究

研究課題名（英文）The treatment of Bombed Buildings during and after the Second World War: A study from the view of Architecture, Urban planning, and Culture.

研究代表者　頴原　澄子（EBARA SUMIKO）
九州産業大学・工学部・講師
研究者番号：40468814

研究成果の概要（和文）：
第二次世界大戦期、英国においては、戦中から各種の戦災建物の記録活動がなされる中で、戦災建物を廃墟となったそのままの姿で保存する可能性が見いだされてきた。ロンドンのシティにおいては、多くの教区教会が戦災を経て価値を再発見され、戦後には戦災を受けたものの多くが復原されたり、他用途への転用がなされたりしたが、３つの教区教会は廃墟の姿のままの保存が行われ、戦災の慰霊碑としての役割を持ちつつも、むしろ、都市のオープンスペースとしての役割を果たすものになった過程が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
Thorough the 19th century, in England, conservation philosophy was widely discussed by such art critics, artists, and architects, as Ruskin, Morris, and Scott. Toward the end of the century, they briefly arrived at a consensus that minimum intervention is desirable for the treatment of historic buildings. It was certainly reasonable treatment in the case the building was only deteriorated by time and weather. However, during the Second World War, people faced to many bombed buildings, and started thinking if the former philosophy was applicable for buildings destructed by bombing. In England, as early as 1941, the National Building Record was established, and started recording of bombed historic buildings. J.M. Richards and A. E. Richardson was its member, and published books of photographs and drawings of bombed buildings. Through such activities, people gradually fostered an idea to use bombed building as war memorial and open space. In the City of London, there were more than 70 parish churches, but through the 19th century, many of them were closed and demolished because of the decrease of the permanent population. However, after the Second World War, many bombed parish churches were restored and reused. Three of bombed churches were converted into open space using the remains of ruined buildings. Here, the ruins are not only war memorials, but also a pleasant open space providing office workers a place for refreshment. In conclusion, this research clarified that the 19th century conservation philosophy was partly modified in the case of the treatment of bombed buildings, but some bombed buildings were preserved as ruins and used for not only as war memorials but also open space, broadened the value of ruined buildings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：建築史
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：歴史的建造物、保存、修復、廃墟、戦災、シティ、オープンスペース、第二次世界大戦

１．研究開始当初の背景
歴史的建造物保存の意義は、とくに 19 世紀西欧諸国における議論をもとに、およそ 20 世紀初頭には、科学的見識に基づき、最小限の介入で、修理の記録を残しつつ行うといった点について合意が形成された。しかし、この方針は、経年変化で荒廃した建造物には相応しいものの、自然災害や戦災などの被害による破壊を受けた場合にも適用すべきか、という点については、議論が十分になされていなかった。従来の建築保存理論研究では、主として 19 世紀までの議論の分析が行われていたが、20 世紀以降の理論の進化の様子、およびその実態については、いまだ十分に研究がなされているとは言えない状況であった。

２．研究の目的
本研究では、20 世紀半ばの第二次世界大戦に着目し、戦災という人災を受けた建物がどのように扱われたかを分析することにより、当時の人々が、歴史的建造物の維持保存についていかなる考えを持ち、実践をしていたのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法
文献調査と現地調査を２つの柱として研究を行う。通常期は各種データベースを駆使して資料収集、資料の所在調査を行い、年に２週程度の現地調査で、現地の現状確認と、所在調査で明らかとなった場所にて資料の収集を行う。

４．研究成果
(1) 第二次世界大戦期の英国における戦災建物の記録活動と廃墟保護の動きについて

本研究では、英国において、戦災で廃墟となった建物を、記念碑として保存するという考えが、戦時中、いかに形成されたかを検証するため、絵画・写真・書物で戦災建物を扱った記録活動に着目し、それらの活動主体が設立された経緯、活動の内容、活動に関わった人々の戦災建物の扱いに対する考えを分析した。

その結果、まず、戦時芸術家諮問委員会は K.クラークを中心に組織され、廃墟画で有名な J.パイパーらの活躍が見られたが、クラークの意図は、あくまでも戦時中にも芸術家に仕事を提供することで、パイパーが廃墟を描いたのも、芸術家個人として、戦時の光景を記録するためであり、廃墟を保護するという考えはとくに見られなかったことが明らかとなった。

次に、国立建造物記録局の設立に関する資料の分析から、この活動は、戦災で失われるおそれのある建物の記録にも目をむけ、既存の資料の集約化を図りつつ、戦災建物の記録写真を広範にわたって集めたことは評価できるが、戦災建物の扱いについては、むしろ復原することを見据えており、まだ廃墟を廃墟として残す可能性についてはそれほど意識していなかったことが明らかとなった。

また、国立建造物記録局の委員会メンバーが関わった２つの書籍を分析したところ、『爆撃されたロンドン』では、A. E.リチャードソンは、ロンドンの建物について細部にわたる著述を試みるものの、廃墟となった建物の扱いには何ら発言をしていなかったことが確認された。一方、『英国の爆撃された建物』では、J.サマーソンの解説は客観的に建物の特徴を語るのみであったとはいえ、J. M.リチャーズの緒言には、廃墟をその美しさのために残すことが提案されていたことが分かった。また、同書に関連する展覧会を通して、戦災建物をどう扱うべきかが、広く問われ始めたことが明らかとなった。

そして、アーキテクチュアル・レヴュー誌に掲載された、「廃墟を廃墟として残す」と

いう提案の内容を分析し、当初考えられた廃墟保護の５つの意義を明らかにした。次にこの提案が、タイムズ紙への投書、そして『戦争記念碑としての爆撃された教会』(Casson, 1945 図１)という冊子に至る間に、とくに「記念碑として廃墟を残す」という意味合いが強調されてきたことを確認した。ただし、「記念碑として廃墟を残す」という考え方は、発表当初から好意的にも否定的にも捉えられていた事実も明らかとなったので、実際にこの考えの採否がどのように決定されて行ったかは、個別の事例を見る必要がある。

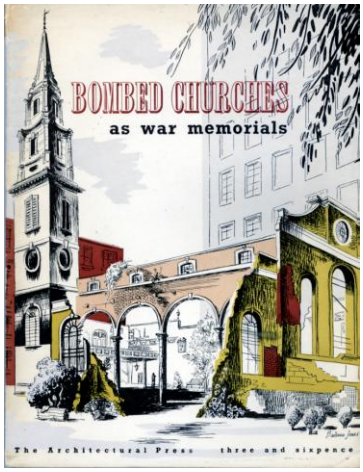

図１ Casson, H. (1945) *Bombed Churches as War Memorials.* 表紙

以上のように、本稿は、廃墟を記念碑として残すという考えが英国において形成された過程を分析したが、最後に指摘しておきたいのは、一連の廃墟・戦災建物の記録をめぐる活動のなかで、複数の活動に重複してみられる人物がいることである（クラーク、サマーソン、リチャードソン、H. S. グッドハート-レンデル)。そして、興味深いことに、この４人はみな、古建築保護協会（The Society for the Protection of Ancient Buildings）のメンバーであった。同協会の年次報告書1940 年版にはメンバーの名前一覧が掲載されているが､これを見るとこの４人以外にも、各種記録活動に参加したものの中には、同協会のメンバーが見られる。また、J. M. リチャーズも古建築保護協会メンバーであった。同協会における歴史的建造物の扱いに関する議論、交友関係が、廃墟保護の思想の形成にも影響力をおよぼした可能性が高い。戦災建物を戦争の記念碑として廃墟のまま保存するという考えは、戦災建物を記録する「活動」そのものとともに、戦災建物の記録活動に関わった「人々」の繋がりによって形成されたとも考えられる。

これらの人的ネットワークがどれほど強力なものであったかを検証するためには、人物間の往復書簡を検討するなどの更なる研究が必要とされる。だが、機関や制度は記録から形成過程をたどることは比較的容易であり、出版物も実物を検証することができるが、人的ネットワークの様相は捉えがたく、また実証しがたい。研究のアプローチの方法を見出すことを含めて今後の課題とする。

(2) ロンドンのシティにおける戦災を受けた教会堂のオープンスペース化の過程について

本研究は、ロンドンのシティにおいて、戦災を受けて廃墟となった教会堂が戦後、オープンスペースとして整備されるに至った過程を明らかにするために、戦前から戦中戦後にかけて、教会堂の存続に関する関係者の見解および、シティ側のオープンスペース獲得の動きがいかなるものであったかを分析した。その結果、戦前から戦後初期にかけての教会側とシティ側の態度は以下のようなものであったことが分かった。

まず、教会側は、戦災前は、定住人口の減少に伴い、多くの教会堂を閉鎖し、土地を売却することを考えていたが、戦争の経験を通して、むしろ復原が可能な教会堂はできるだけ復原するという方針転換をしたことが分かった。ただし、教会堂としての使用が不可能で、他用途にも転用できないものについては、取壊しの上、敷地を売却する以外の選択肢は考えず､1946 年にシティの教会堂に関するロンドン大司教の委員会が最終報告書を出した時には、事実上、廃墟を保護する意思はなかったことが明らかとなった。

一方、シティ側は、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて、オープンスペースの必要性を感じ、不使用墓地のオープンスペース化および､所有権を保持させたままに私有地のオープンスペース化を推し進める法令を整備しており、その過程において、すでにミース卿により､シティには｢小さなオープンスペース｣がふさわしいという考えが提出されていたことが明らかとなった。また、シティの復興都市計画においては、教会堂を都市風景の中で際立たせるために周辺建物のセットバックが提案され、また、あくまでも教会の立場を尊重しながらとはいえ、取壊しが提案されていた教会堂の建つ敷地をオープンスペースとして獲得する意思が示されていたことが分かった。

そして､戦後､約 15 年から 20 年が経って、教会側は復原のできる教会堂の復原事業を終え､シティ側は｢小さなオープンスペース｣の集積を地道に計画していたときに、ようやく、3 つの戦災を受けた教会堂（セント・ダンスタン・イン・ザ・イースト図 2、セント・メアリー・アルダーマンベリー図 3、クライスト・チャーチ 図 4）のオープンスペースとしての整備事業が始まったのだが、これら 3

つの戦災を受けた教会堂のオープンスペース化の過程を追ったところ、次のようなことが明らかとなった。

図 2 セント・ダンスタン・イン・ザ・イースト

図 3　セント・メアリー・アルダーマンベリー

図 4 クライスト・チャーチ

まず、これら 3 つはすべてコーポレーション・オフ・ロンドンが敷地を買い取ってオープンスペースとしての整備を進めたという点が共通しているということである。このことは、これらのオープンスペースの宗教的な側面を弱め、1945 年のカッソンらの提案に見られたような都市のアメニティ向上の場としての性格を強める要因の一つになったと筆者は考える。また、3 つの例のうち、セント･メアリー･アルダーマンベリーとクライスト･チャーチは戦後に移築や道路拡幅による一部取壊しがあり、戦災に加えて新たな歴史が刻み込まれたことになったことも明らかとなった。

以上、廃墟保護の視点から見ると、これらの 3 つの教会堂の残され方は、記念碑性にも乏しく、むしろ教会堂をとりまく諸々の事情が優先されて、残存度も必ずしも高くない。しかし、戦後約半世紀におよぶ、これらの 3 つの事例が示したような多様な展開を通して、英国における戦災を受けた建物は、単に戦争記念碑としての意味合いだけでなく、都市の憩いの場たるオープンスペースを供給するという役割を獲得し、それぞれに新たな歴史を刻みつつ存在していることが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①<u>頴原澄子</u>、ロンドンのシティにおける戦災を受けた教会堂のオープンスペース化の過程について、 建築史学、査読有、 第 53 号、2010、
pp. 52-84

②<u>頴原澄子</u>、歴史的建造物保存修復にまつわる言葉の変遷について、九州産業大学工学会誌、査読無、 vol. 46、2010、pp. 18-19

③<u>頴原澄子</u>、再現批判の系譜.イギリスのゴシック･リヴァイヴァルの盛衰にみる再現に類する行為の批判の根拠、建築雑誌、査読無、vol.125 no.1598、2010、pp. 30-31

④<u>頴原澄子</u>、書評『ゴシック・リヴァイヴァル』ケネス・クラーク著　近藤存志訳、ラスキン文庫だより、査読無、第 57 号、2009、pp. 21-23

〔学会発表〕（計２件）
①<u>頴原澄子</u>、第二次世界大戦後のコヴェントリー市中心部における復興都市計画：ギブソン案の変容について、日本建築学会、2009 年 8 月 26 日、東北学院大学（仙台市）

②<u>頴原澄子</u>、ロンドンのシティにおける廃墟となった教会のオープンスペース化について ： クライスト・チャーチを例として、日本建築学会、2008 年 9 月 20 日、広島大学（東広島市）

〔図書〕（計１件）
①鈴木博之先生献呈論文集刊行会 （編集）、中央公論美術出版、建築史攷、<u>頴原担当部分</u>、第二次世界大戦期の英国における戦災建物の記録活動と廃墟保護の動きについて、pp. 529-548、2009

〔その他〕
ホームページ等
http://www.geocities.jp/ebarasumiko/

６．研究組織
(1)研究代表者
頴原澄子（EBARA SUMIKO）
九州産業大学・工学部・講師
研究者番号：40468814